

此の町は、舊藩中は武士の邸地にて、一番町より四番町まで四町ありて、一番町に篠原出羽守の居第あり。故に町名となしたり。村井長明の陳善録に、利家様上方より金澤へ下向し給ふ時、齋藤八太夫を山神と云他國牢人者暗打にす。篠原出羽下町に彼山神の縁者有之を引出し、成敗被仰付。といふ事見たり。慶長十一年石浦七村氏子連判訴狀に、出羽殿町と記載したれば、此の時代より既に町名に呼びたりしこと知られけり。元祿六年の士帳にも、出羽殿町とありて、元祿の頃までも出羽殿町と呼びたるなるべし。小立野岩倉寺貞享二年の由來書に、篠原出羽町とあり。従前は武士の邸宅數十戸ありしかど、廢藩後は追々家屋を毀ち田畠となしたるを、明治十九年五月金澤陸軍營所の御用地と成り、一番町二番町三番町及び其の繼ぎなる鷹匠町并に欠原町の邸地を悉く御買上げに相成り、地所の高低を平均し、一圍の地となして、兵隊の練兵所と成したりけり。

○篠原出羽守邸地

出羽一番町にて、本多氏邸地の南横町の内也。延寶金澤圖

に、篠原監物・篠原頼母兩人の邸地とす。元は一所の邸地なりしかど、兩家に成りし時、兩邸地に割り、頼母は後に移轉し、悉く監物の邸地に成りたりしと聞ゆ。そのかみ出羽守の居邸成りし頃は、此の地邊悉く邸地なりしにや。

○篠原出羽守一孝傳話

一孝は、篠原彌助の男にて、若名を勘六と云ひ、幼年の頃より利家卿に奉仕し、度々の武功に依つて追々登庸せられ、家祿一萬三千石を賜はり、利家卿の舍弟佐脇藤八郎主の息女を娶り、天正十九年六月叙爵して肥前守を拜任し、後出羽守と成り、執政國老に列し、元和二年七月廿二日五十五歳にて卒せり。利家卿の遺誡書に、出羽事、せがれより我等側に召仕、心持能く片口なる律儀者にて、城など預け置候て能き者に候。其上末森の時分、若年に候得共手前殊の外能く候間、我等姪輩に致し候。關東陣之刻も八王寺にて能く候。と載せられたり。按ずるに、陳善録に、末森後詰の時、篠原勘六よこねを煩ひ、御留守仕候へと被仰候へば、耳にも不聞入、御請不申上罷出、鏝下の高名致し、何もかんじ申。とあり。八王寺の事は三壺記に、北陸勢關

東八王寺へ攻め入る時、篠原勘六、不破彦三其の外骨折りたる者餘多也。と見ゆ、關屋政春古兵談に、八王寺城を乗取る時、石川三丞横筋の羽織にて一番乗して、殊に敵を討取、能き働き也。此事秀吉公の御耳に立、何と云ふ者ぞと御尋也。利家卿、篠原勘六と申者と御答被成、秀吉公被聞召、扱も能き者を被持候と御譽被成たり。石川三丞とは、能く御存知の處、勘六と御答へある奥意如何不知。夫までは少身なりしを、程なく御取立、九千石に被成、出羽守に被成。といへり。又三壺記に、文祿元年に利長卿、利家卿の命に依つて金澤城の石垣を築立てさせ給ふ處、東の方兩度迄崩れ、御難儀被成由、利家卿上方に御座被成被聞召、篠原出羽に委細被仰含。金澤へ罷下、出羽築立てさせけるに、高石垣に段を致したる事、沙汰の限りと被仰、利長卿以の外御腹立被成云々。と見ゆ、政春古兵談に、慶長四年八月利長卿入國被成、篠原出羽守越前金津迄御迎に出、則金津にて御飯を上げんと用意す。利長卿是を聞召したりけん、金津を直に通ひ給ひ、出羽守面目を失ひけれども、少も屈せず。急ぎ金澤へ歸り、金澤にて御

落着の御膳を上げんと用意す。利長卿御機嫌直り、御快く御膳召上がられ、其より利家卿の時の如く被召仕と云々。又拾葉名言記に、金澤城石垣被命時、利常卿御家督以前にて、河北門の升形築かせらるべきとて、大形出來す。然る處、篠原出羽上方御使に參、罷歸見申て、此所は御城の大手也。石小く見苦敷段申上げ、打崩し築直す。利常卿甚御腹立被成、若し家督御譲りあらば、出羽を成敗可被成と思召けるが、追て御家督ありしに、出羽ほどの者また持事難し、中々成敗はおもひもよらずと、神戸清庵などに御物語ありと也。又云ふ。慶長七年五月太田但馬守を城内にて、殺害命ぜられし時、篠原出羽守來り、見苦敷とて羽織を脱ぎて但馬が死骸に掛けたり。一段おとなしく見たりといへり。按ずるに、村井長明の象賢紀略に、其時篠原出羽へんじ門をば入申時の申分氣分を後々まで譽申すとあり。その申分の趣旨は、未だ詳かならず。又關屋政春の古兵談に、利家卿能登國を賜はり入部し給ふ後、同國松百といへる所にて、釣をたれ給ひけるに、松百の橋の上にて大きな鱸釣針に懸る。利家卿甚悦び給ひ引あげ給ふに、